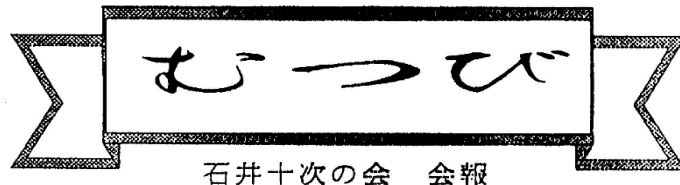


2025 年
(令和 7 年)
9 月 11 日



336 号

石井記念友愛社に勤めて思う事 そして今

石井記念明倫保育園 園長 石塚祐子

私は現在、高鍋町にあります石井記念明倫保育園に勤務しています。

友愛社との出会いは、^{さかのぼ}遡る事（大げさですが）47 年前、短大の施設実習で友愛園にお世話になった事から始まります。

歴史上の人物 石井十次先生縁の施設があることを知り興味をもち実習に臨みました。

当時は、幼児館（幼児）天心館（小学生）三友館（中・高校生）3 つに分かれており私は幼児館での実習でした。四六時中一緒にいて子どもたちのためにお世話をされている姿は、まさにお母さん「母親」でした。

「先生」ではなく「おばちゃん」「おねえちゃん」と呼び、一つの家族の雰囲気です。子ども達が甘えられる雰囲気で受け入れてもらえ、お姉ちゃんたち（職員）もしっかり受け入れている関係、愛着関係を感じ取りました。

その年の3月下旬1週間ほど見習い期間終了後4月より友愛園に入職しました。

1 年目は天心館、事務所、のゆり保育園（調理）の勤務、その後は天心館のみの勤務で友愛園 5 年牛牧保育園（現在 やまばと保育園）の勤務後退職しました。

友愛園での 5 年間をとおして感じたこと思うことは、当然のことながら石井十次先生のなされた偉業を忘れずその意思を継いで福祉事業をされている理事長先生をはじめ、職員の方々、「石井十次の会」の皆様、地域の皆様の熱い思いが行動となっていると思います。十次先生の思いが脈々と受け継がれ、これから先もずっとそうあると信じています。

子ども達と一緒に寝食を共にした生活の中で年齢にあった作業の取り組み、キャンプ、一泊旅行、外出、参観日等たくさんの思い出が出来ました。

思い出の一つに新任職員は三友館のキャンプに参加するようになっておりました。そのキャンプは今では考えられないようなキャンプ、サバイバル的なキャンプ。その年は台風の去った後で大分の竹田城へ行き山越えて高千穂へ出てくるコースでした。行きは高鍋駅から竹田駅までは汽車を利用、その後はひたすら歩く道なき所、山の中を先頭の先生は鉈等で切り開きながら行かれその後を皆が付いて行く。

山の上流では台風の後のため水量があり、こちら側から向こう側へロープを渡し、そのロープで荷物を運びその後三友館男子、女子、女子職員（2名）前理事長先生（児嶋琥一郎氏）の順だったように記憶しています。現理事長先生（児嶋草一郎氏）は先に渡られていたように思います。いよいよ私だ、と思いロープにしっかり掴まり、そこまでは良かったのですがなぜか足をバタ足のようにバタバタ（水の流れも速く流されまいと思い）。「早く渡れ」と注意され必死で渡りました。上流のその幅はそんなに広くはなかったように思います。

胸のあたりまでびしょ濡れ歩いていくうちに乾きました。その歩いている途中、足元にグロテスクな虫がたくさんいて歩くよりピョンピョンと飛び、早くその場から遠く去りたい思いでした。その当時は大変だった、もう二度と行きたくない、と思っていましたが今では笑い話となっています。すごい体験をさせていただきました。

子ども達との愛着関係も毎日の積み重ねであり1年2年でできるものではないと痛感しました。

10年のブランクがありましたが縁あって復帰。ひかり保育園、にっしん保育園そして今の明倫保育園に勤務させてもらっています。保育園では毎日子どもたちの笑顔が見られ色々な行事を楽しみながら子どもたちの成長を感じ見る事が出来る日々です。

石井記念友愛社にお世話になって通算38年目になります。他では経験しない事を経験し、色々な方との出会い（友愛社だから出会えた方）があります。何不自由なく育ち生活してきた私はそれまでの生活以降に色々なことを学び考えそして感じる事が出来ました。

余談ではありますが母方の祖母が高鍋の製紙工場で十次先生にお世話になり祖母の父が亡くなった際に「一番いい着物を持って帰りなさい。」と言われ見送ってくださったとの事（私の母からの話）。多少なりと縁があったのかなと思っています。石井記念友愛社に入職して良かったと思います。ありがとうございます。

文才がなく拙い文になり恥ずかしい限りですがこのような機会をいただきありがとうございます。

掛け干し米にこだわって～Mさん家族の手伝い

9月は普通作の稲刈りのシーズン。多くの農家がコンバイン（収穫作業を効率的に行う機械）を使って、刈り取りや脱穀を一気に行っている。一方、私の家では、稲を刈り取った後天日で乾燥させる「掛け干し」にあえてこだわっている。「掛け干し」は数百年～数千年前から行われてきた米の乾燥方法といわれ、時間と労力がかかりとても大変な作業だ。それでも短時間で乾燥させた米よりも格段においしいと感じている。自分たちの体が動く限りこの歴史あるやり方を続けようと思っている。

実は、数年前までは多くの親せきや地域の人が手つだいに来てくれ2日間で終わることができていた。ところが、高齢化が進み働き手の減少と労力の低下に伴い、なかなか作業がはかどらずもどかしい思いをすることもしばしば。労力を確保するには難しい現状がある。隣近所の田んぼではコンバインを利用し、短時間で収穫・脱穀が終わっており正直焦ることもある。

しかしながら、稲刈りするにも掛け干しするにも時間が十分あることを再認識した私たち夫婦は、1週間かけてゆっくり作業を進めていくことにした。すると心が軽くなり、余裕がでてきた。これから自分たちのペースでやっていけば、稲刈りや掛け干しは負担を感じることなく続けられると考えた。そんな矢先の令和2年のこと、台風直撃により収穫間近の稲が倒伏してしまう。甚大な被害を受けてしまった私たちは、ただ茫然と立ち尽くす。だが、せっかくここまで生長し、たわわに実った稲。このまま放置するわけにはいかない。心が折れそうになりながらも、数日かけて稲を起す作業に明け暮れたことは記憶に新しい。近くの田んぼでは時短と効率の良さに定評のあるコンバインで刈っている光景が目に残る。こんな時「我が家のこだわりは掛け干しにあり」「よしっ、頑張るぞ」と何度もつぶやき自分の心を奮い立たせたものだ。

ここ2～3年のことだが、稲刈りと掛け干しの時期には、近所の方が手伝ってくれるようになった。その方はMさん。夫が声をかけたところ、「是非手伝いたい。」「家族にも体験させたい。」と言ってくれた。Mさんとその妻、子どもが小学2年生を頭に保育園児が2人である。とても元気よく「おはようございます。」とあいさつする子どもたちである。初めて体験する稲刈りと稲運び。それぞれが自分にできる作業を自分のペースでやってくれる。ほんとにありがたい。手刈りで稲刈りをしたことがないS君は、さっそく鎌をもって挑戦した。目をキラキラさせて2株目、3株目・・・10株目と自分が納得するまで次々に刈っていく。作業が終わると、周りの人のやり方を見て稲を2株ずつ抱きかかえて父親Mさんの元へ運ぶ。Mさんはそれを干し竿にかけていく。皆さんから労力とあふれるほどのエネルギーをいただき、この年の稲刈り・掛け干しを無事終えることができた。

昨年S君は4年生になり体が一回りも二回りも大きくたくましくなっていた。作業の工程を周知していて、笑顔を振りまきながら、一輪車に乗せた稲の束を所定の場所まで手際よく運ぶ姿は大人顔負け。猛暑の中、「ちょっとだけ休憩します。」と自分の体をいたわりつつもよく動くS君に脱帽。稲の束が少なくなっている場所を見つけると、すかさずそこに積み上げていく。まだ3年生のS君にとって興味深い作業とは到底思えないが、最後までやり遂げられる原動力はいったい何なのだろう。そういえば、いろんな人から「ありがとう。」と声をかけられ、その度になっこりしていたのが印象的だった。そして、掛け干し米を作ることができた。

Mさんご夫婦の背中を見ながら豊かな自然の中で育っているS君と妹弟たち、今年もよろしくお願いします。

ここ友愛園では、子どもたちの忍耐力・体力をつけるために稲の手植えと手刈りを毎年体験させている。



稲の掛け干し

7月の編集委員会報告

7月の編集委員会は23日(水)に開催した。

原稿締め切り日は曜日にかかわらず前月の15日としている。

それを受けて、編集委員会を20日以降に開催する。

とはいえ、月末間際では印刷・丁合等の事務作業に支障を来すのでほぼ20日から25日までに開催することが定例となっている。

写真はその一コマである。



●ちなみに編集委員を紹介

竹之下 悟 編集委員長(西都市)

徳地 順子 編集委員 (高鍋町)

石川 正樹 編集委員 (高鍋町)

松下 さおり 編集委員 (宮崎市)

黒木 三鶴 編集委員 (西都市)

西村 さと子 編集委員 (高原町)

7月編集委員会 左は橋田和実会長

竹之下は編集委員歴8年目となり古参

の部類となった。

その間、委員交代は生じているがここ3年ほどは現行メンバーで推移している。

メンバーそれぞれ様々な事情を抱えながらも寄せられた原稿の熟読玩味に邁進しつつ自己研鑽に努める定例会である。

そして特筆すべきは二つある。

まずは、石井十次の会 橋田和実会長には市長退任後、ほぼ参加いただいていることである。

「地域への改めての恩返し」との本人談。「和して同ぜず」精神での高所大所からのご意見やアドバイスはとても貴重である。

二つ目は、重鎮とリスペクトしている石川正樹委員執筆の「石井十次を支えた先人たち」続編を本年度末に刊行予定であること。

監修は「むつび編集委員会」となるので6月定例会から時間を特設して監修作業に当たっている。乞うご期待。

編集委員長 竹之下 悟

《 お し ら せ 》

★ご寄付をいただきました(敬称略)

【高鍋町】 鶴 敬雄 【延岡市】 土井 裕子 【福岡県】 山崎 数彦

*ここまでの掲載者は編集等の都合により8月20日までのものとしています。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

〒884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1

社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

●巻頭原稿は石井記念明倫保育園 園長 石塚祐子様に玉稿をいただきました。十次の偉業を正しく受け継ぐ具体として三友館生徒との過酷なキャンプ経験も位置づくのだろうと感銘を受けました。

編集委員長 竹之下 悟